

# スポーツとしてのゴルフに関する一考察

ニュージーランドのゴルフを事例として

山本英毅（日本福祉大学）

ゴルフ、社会問題、ニュージーランド、みんなのスポーツ

## 1. はじめに

「ゴルフと聞いて私が連想するものは、環境破壊、接待ゴルフ、会員権、等およそスポーツに似つかわしくないことばかりである。（中略）今、ゴルフの悪い面ばかりがクローズアップされているため、ゴルフに対してほとんど無知の私でさえよいイメージは持っていない。スポーツが持つイメージとあまりにもかけ離れているのである」

これは、体育講義時における一学生のレポートである。他の学生の一人も次のように指摘する。

「私はゴルフ場で一時働いたことがあります。働く前まではあんなのスポーツじゃない、嫌いだ、と思っていました。でも、実際にゴルフをやっている人達が、一打一打に神経を集中させ、一生懸命になってボールを追う姿は本当に楽しそうで、すがすがしくて、他のスポーツと何の変わりもないと思うようになりました。私も一度だけコースを回らせてもらいましたが、かなりの距離を歩き回ります。とても健康には良いスポーツだと思います。一度やってみれば分かるでしょう。ただ、私がまだ心にひっかかるのは環境破壊の問題です。（中略）環境にやさしい、そして今のゴルフがそのまま楽しめるような良いアイデアがないかなあ…。」

大変なゴルフブームである。

自然破壊や農業汚染、そして会員権問題など多くの社会問題を抱えるゴルフブームは、バブル経済の崩壊と景気後退により、これからどう変わっていくのだろうか。すでに、接待ゴルフを中心に超豪華コースや遠隔地のゴルフコースから客足が落ちている。リゾート法のスタートでゴルフ場開発に飛びついた自治体では、さまざまなトラブルを生じている。そもそも地域の活性化やスポーツ振興を、従来のままのゴルフに託すこと自体に無理があった。例えば、神奈川県と山北町の公営ゴルフ場計画について、県知事は県企業庁の事業化調査を踏まえ「計算すると経営が成り立たない可能性が大きい。大量の県費を投入するだけの名分はたたず、別途、地域振興を考える方向にきている」と語っている（日本経済新聞、92年3月17日付）。昨今のゴルフ場面一化、高級化志向に追従する限り、プレー料金は高額にならざるを得ない。誰もが、いつでも、気軽にスポーツに親しめるような県民スポーツに、いまのゴルフは応えていない。

これまで、法人需要など自腹の痛まない層によって、豪華なクラブハウスや完璧なコース管理が求められ、値段の高さがゴルフ場の善し悪しを決めるような傾向が生まれてきた。スポーツとしてのゴルフとは無縁のゴルフ場の出現である。その結果が冒頭に挙げた学生のゴルフイメージであり、ゴルフを変えたいという想いにつながっているのである。

本年2月に発表された「体力・スポーツに関する世論調査」によれば、ゴルフを実施した人は11.8%、種目別順位では6位になっている。これを男性だけについて見ると21.1%で3位。40才代が5位（16.6%）、50・60才代が4位（9.3%と4.4%）で、中高年齢層に人気が高い。今後やってみたいスポーツ種目としてはゴルフがトップで、その割合は4人に1人となっ

ている。

一方、スポーツクラブ・同好会への加入者の割合は全体で17.7%にすぎない。しかしそのうちでは、ゴルフクラブへの加入が最多で14.7%となっている。

このように、国民に最も親しまれているスポーツの一つがゴルフとなっているにもかかわらず、ゴルフはぜいたくな遊びとして多くの人びとから白眼視され、国からはゴルフ場利用税を課せられている。みんなのスポーツというにはお寒い状態にある。

ゴルフを真に大衆的なスポーツにするためには、スポーツとしてのゴルフの本質を理解し、現在のゴルフイメージを変革していく必要がある。スポーツとは無縁な過剰サービスを排し、施設を簡素化し、キャディなしの低料金でラウンドできるようなゴルフ場を一般化してこそはじめて、みんなのスポーツと言えるのではないか。ゴルフが社会問題として問われている時こそ、ゴルフの流れを変えるチャンスである。

これからの日本におけるゴルフの方向を探る時、諸外国におけるゴルフ事情が参考になる。ゴルフ大国アメリカや、ゴルフ発祥の地スコットランドのゴルフについては日本でもかなり知られているが、ニュージーランドのゴルフについてはあまり知られていない。イギリス、特にスコットランド系の移民により成立したニュージーランドは、ゴルフの歴史も古く、子どもから高齢者まで幅広い層に親しまれている。

ここでは、ニュージーランド人の生活に深く根を下しているゴルフクラブの実状について紹介し、スポーツとしてのゴルフを考える素材としていきたい。

## 2. 研究の方法

ゴルフ場のガイドブックにより、ゴルフコースの開設年、コースの規模、グリーンフィ（プレー料金）等の事項をまとめ、ゴルフ場の全体像を明らかにする。取り上げた資料はNew Zealand Golf Guide (1991、1992年版)、補足としてGolf Courses (1989年版)を利用した。なお、ニュージーランド人の生活とゴルフについては、1年間のニュージーランドでの生活体験とヒラリーコミッションによる調査報告書、Life in New Zealand (1991)によった。

## 3. 結果と考察

### 1) ニュージーランド人の生活とゴルフ

ニュージーランドは国土の半分が牧草地で、家畜等の第一次産業を中心とする先進農業国。国土面積は日本の約3/4、人口は343万人、羊は6000万頭を超える牧草の国である。英国と同様、夏の乾燥、冬の湿潤さが夏草などの雑草を押さえ、芝生の上のスポーツを隆盛させた。ゴルフもその一つで、どんな田舎の町にも“Visitors Welcome”のゴルフクラブの看板を見るほどである。自治体の経営するコースは少ないが、ほとんどすべてのクラブは一般に開放されており、いつでも、どこでも、誰もが、驚くべき安い費用でゴルフを楽しむことができる。写真①は、ある田舎のクラブハウス前に無雑作に掲げられた年会費の案内である。ちなみに、南島一の名門コース、クライストチャーチゴルフクラブでさえ年会費は750ドル（6万円弱）である。

ニュージーランドではゴルフは冬のスポーツである。冬比較的温暖であること、芝生が冬に生き生きと美しくなることの理由もあるが、夏の間は海や湖、川でのアウトドアスポー

ツに忙しく、ゴルフをするのは冬しかないというのである。子どもたちも学校が終われば、近くのゴルフ場で練習できるし、ファミリーで楽しむ姿も珍しくない。子どもたちは優遇され、グリーンフィが25セント（約20円）というゴルフ場もあった。

一般に、ニュージーランド人は保守的で質素、合理的な生活態度をもつ。ゴルフ用具にしても古いものを平気で使用する人も多く、それでいて腕前は概していい。

このようにニュージーランド人にとって、ゴルフは特別なスポーツではなく、生活にとけ込んだスポーツ・レジャーとなっている。

ニュージーランド人のレジャー活動（過去4週間）は、1位が読書（48%）で、以下TV・VTR（42%）、友人訪問（35%）、音楽を聞くこと（32%）、庭いじり（28%）、スポーツ（26%）、ウォーキング（22%）の順になっている。同じくスポーツ参加率では、1位がスイミング（27%）、以下サイクリング（17%）、ビリヤード（14%）、テニス（14%）、エアロビクス（12%）の順で、ゴルフはラグビーと並んで6位（8%）につけている。ゴルフ実施者を性別に見ると、男子12%、女子5%、年齢別では男女とも45～64才の中高年にピークがあり、それぞれ17%、9%となっている。

## 2) 世界一多いゴルフ場

1991年現在、ニュージーランドのゴルフコースは396、1コース当たりの人口は8674人。日本は7.1万人、イギリス2.8万人、アメリカ1.9万人と比較すれば世界一のゴルフ天国といえる。

## 3) ゴルフ場開設の時期

一番歴史が古いオタゴゴルフクラブは1871年の創設。1900年までに11のクラブが設立されている。1930年代（64コース）、60年代（61コース）と2つの増加のピークがある。

## 4) ゴルフコースの規模

### ①ホール数とパー

18ホール55.1%、9ホール37.4%、パーは72が38.1%というように多様なコースがある（9ホールの場合は倍にして計算）。あるがままの自然を利用した造成や財政事情からすれば当然のことであろう。18ホールを超えるコースは3コースにすぎない。なお、18ホール未満のコースは2回りして楽しまれている。

### ②コースの長さ

一番多いのが5400～5800mの間のコースである。4600m未満のコースも1割と多い。

### ③グリーンフィ

1回のプレー料金は、6～10ドルが34.1%と最も多く、次いで5ドル以下が32.6%、両者合わせると10ドル以下が全体の66.7%を占めている。大都市周辺は高水準のゴルフコースが多く、料金も割り高傾向にあるが田舎ほど安く、1ドルから50ドルの幅がある。メンバー同伴の場合は半額に割り引きされる。もちろん、メンバーは会費のみでプレー料金は不要である。

### ④一般開放とサービス内容

一般開放されていないのは1コースのみである。しかし、どのコースにもメンバーが優先権をもつ曜日、時間帯があるので、部分開放ということになる。空いていればいつでも利用できるが、事前に調整の必要などところもある。

ゴルフショップが設置されているコースは3割弱と少ない。所属プロのいるコースは16.

2%。貸クラブ等のサービスは22.7%のコースで行われている。

なお、ゴルフショップがないコースは特別の受け付けがあるわけではなく、写真②のように各人はセルフサービスで料金を支払い、適宜スタートする。

キャディ制度がないので、バッグを担ぐかカートを利用して18ホールを一気に回る。途中で茶屋などの休憩施設はない。

#### 4. まとめ

ニュージーランドでは、スポーツ・レクリエーションクラブ加入者の比率は47%と高い。しかも、加入者のうちの半数は2つ以上のクラブに入っている。スポーツ・レクリエーションの全国組織だけで190。ニュージーランドゴルフ協会もその一つで、現在会員数は12万。この他に、プレーの都度、お金を払うグリーンフィプレーヤーが29万人いるから、合わせて41万のゴルフ参加人口となる。従って、ゴルフ場一つ当たりのゴルフ人口は約1000人。日本の約8000人と比較すれば、いかに恵まれているかが分かる。

しかし、これまで見てきたように、ゴルフ場の水準やサービスは多様で、日本のようなゴルフ場の画一的な高級化は見られない。国際級のゴルフ場から、羊が草を食むゴルフ場までである。

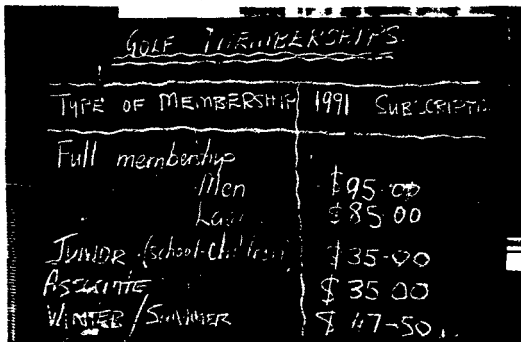
日本のゴルフイメージからすれば、ゴルフ場といえない水準のゴルフ場も多い。豪華な風呂も、食事も、キャディのサービスもない。しかしそこには、スポーツの主人公にふさわしいメンバーがいる。ピジターを暖かく包んでくれる雰囲気がある。自分達で創ってきたクラブの歴史がある。スポーツクラブは地域の核としての存在を認められ、クラブもまた地域に開かれているのである。

日本でも、パブリックゴルフ場の人気は高い。9ホールのコースも沢山ある。最近のゴルフ場開発規制の中には、パブリックコースとか地域への開放を条件にしているものも見られる。しかし一方、上田市議会において、9ホールという規模への疑問が指摘され、市はパブリックゴルフ場の建設を断念したというケースもある（1992年3月10日付信濃毎日新聞）。

なぜゴルフ場は高級なサービス提供施設でなければならないのか。なぜ芝生に雑草が生えていけないのか。せまい国土、芝生には適さない気候の日本で、ゴルフをスポーツとして発展させるには一人ひとりのゴルフ観を変えていかねばならない。

ニュージーランドのゴルフクラブをそのままモデルにすることは不可能である。しかし、その在り方から多くの示唆を汲みとることは可能である。

写真①



GOLF MEMBERSHIPS	
TYPE OF MEMBERSHIP	1991 SUBSCRIPTION
Full membership	
Men	\$95.00
Women	\$85.00
JUNIOR (school children)	\$35.00
ASSOCIATE	\$35.00
WINTER/SUMMER	\$47-50

写真②

